

出世帯

京山のオリジナル袋帯「出世帯」です。

波頭とそれをさかのぼる鯉を中央にあしらい、
周りを物と精神の豊かさを呼ぶ宝尽し文様でまとめました。
古くより龍は、守護・開運の神通力をもち、日の昇る東に
飾るとよいといわれております。

鯉は、滝を昇り天で龍になるといわれ出世運が強い吉魚と
されます。

鯉の滝昇りは、立身出世祈願としてなじみの深い図柄です。

古代中国の「急流の滝を登りきる鯉は、登竜門をくぐり、
天まで昇って龍になる」という「登竜門」の故事が元になっており、日本でも立身出世の
象徴として盛んに描かれてきました。

「鯉」の名前の由来は雌雄相恋して離れないものなので、恋から出た名であるとする説、
味が他の魚にまさっていることから、越（コエ）の意味から派生したとする説、味がよ
いために、人が「恋い慕うもの」であるからとする説などがありますが、いずれも『鯉』
が人を惹きつけて離さない魅力を持つ縁起物であることを語っています。

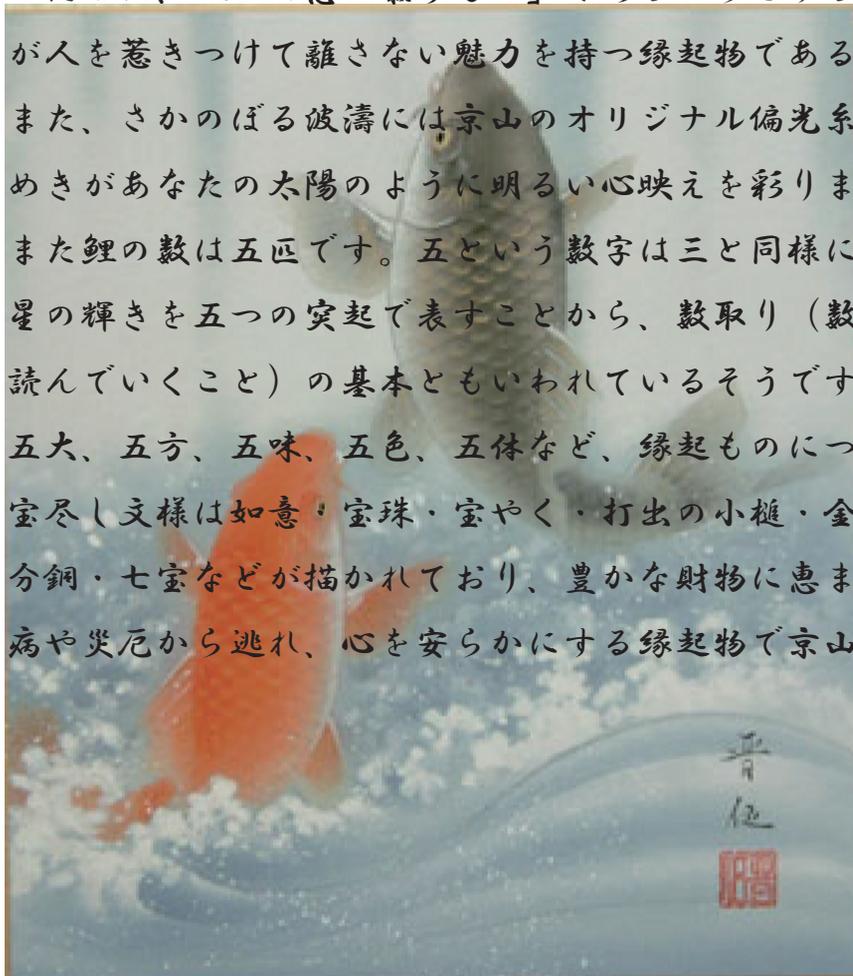
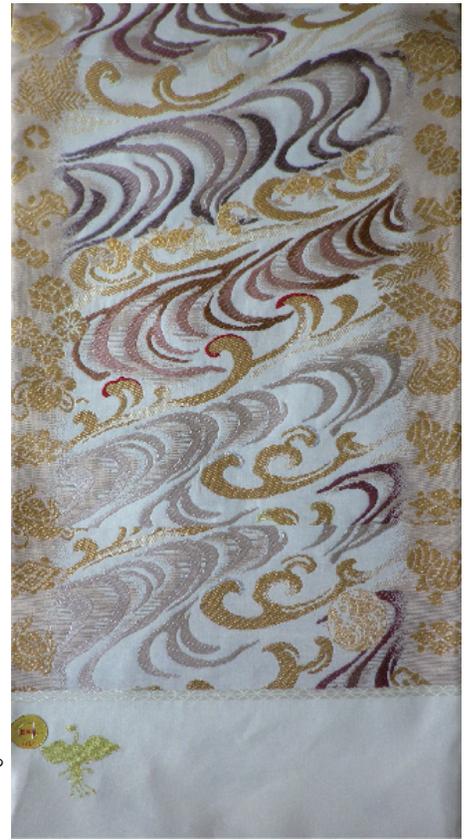
また、さかのぼる波濤には京山のオリジナル偏光糸が織り込まれ、運氣の上昇を呼ぶきら
めきがあなたの太陽のように明るく心映えを彩ります。

また鯉の数は五匹です。五という数字は三と同様に、再生の意味があります。

星の輝きを五つの突起で表すことから、数取り（数取りとは五、十、十五と数をまとめて
読んでいくこと）の基本ともいわれているそうです。

五大、五方、五味、五色、五体など、縁起ものにつながる数字です。

宝尽し文様は如意・宝珠・宝やく・打出の小槌・金囊・隠蓑・隠笠・丁字・巻物・軍配・
分銅・七宝などが描かれており、豊かな財物に恵まれ、身を守り災難に遭わないようにし、
病や災厄から逃れ、心を安らかにする縁起物で京山のオリジナルにもたびたび登場します。





出世帯の帯裏には鳳凰柄を配しました。鳳凰（ほうおう）は、鳳皇とも書かれ、中国の伝説の鳥、霊鳥です。

日本のほか東アジア全域にわたって装飾やシンボル、物語などで登場します。

鳳凰が平安を表すとされるのは雌（凰）雄（鳳）一対であることから、陰と陽の対立を持って調和をなすとする陰陽思想から来ています。

『本草綱目』によれば、360種の羽を持つ動物の長であり、鳳凰が飛ぶ時には、その徳によって雷も嵐も起こらず、河川も溢れず、草木も揺れないといわれています。

そして、鳳凰が空を飛べば、他の鳥もその後をについて飛び、鳳凰が死ねば多くの鳥が嘆き悲しんだといえます。

「天子が正しい政路を行った際に現れる」「聖天子の出現を待つてこの世に現れる」といわれる瑞獣（瑞鳥）のひとつで、『礼記』では麒麟・霊亀・文鳥とともに「四霊」と総称されます。

日本では一般に、背丈が4～5尺はあり、その空姿は首は鶏、頸は蛇、背は亀、頷（あご）は燕、嘴は鶏、尾は魚だといわれ、

五色絢爛な色彩で、羽には孔雀に似て五色の紋があり、声は五音を発すると伝えられています。

殷の時代には風の神、またはその使者（風師）として信仰されており、

その後「万物は木・火・土・金・水の5種類の元素から成る」とする五行思想では四方をつかさどる神獣のうち南方を守護する「朱雀」と同一視され、火の属性を持つようになりました。

このため、鳳凰がモチーフにされる際にも、火の鳥として描写されることが多いです。

鳳凰は縁起のよい鳥であることから、多くの美術品や建築物にその意匠が使われています。

日本では平等院鳳凰堂（宇治市）や鹿苑寺金閣（金閣寺、京都市）の屋根にあるものが有名です。

特に鳳凰堂屋上の上ものは2004年から発行の現行一万円札裏面にも描かれています。

